

神事化する地域イベント

—— 山形県寒河江市の寒河江八幡宮例大祭と「神輿の祭典」を事例に ——

菅 井 冴 織*

1. 問題関心

日本の各地には家・村・都市・地域・国家の祭りが数多くある。地域性の濃い盆や正月の行事、ムラの農耕儀礼や神楽といった伝統的な行事から、国家・地方自治体・学校の行事やイベント、デパートや商店街の催し物など、様々なものを広く「祭り」と呼んでいる。だが、民俗学者である柳田国男は『日本の祭』で一般的に「祭り」と呼ばれているものを、「祭礼」と「祭」に区別している。

「祭礼は祭の一種特に美々しく華やかで、楽しみの多いものと定義ができる」（柳田 1956；36）。具体的にいえば、「見物というものが集まってくる祭が祭礼」（柳田 1956；37）であり、「後にいろいろの趣向を凝らし、新たな催し物などをつけ添えて、華々しいものにした」（柳田 1956；40）もののことをいう。一方、「祭」とは、主に神事（儀式）のことであり、氏子や宮司等が静寂の間に挙行している神を祀るものと位置付けられるだろう。しかし現代の「祭り」を考えれば、柳田の時代とは異なり、「祭」と「祭礼」には著しい差が感じられなくなっている。具体的には、「祭」がたくさんの観光客にも見ってもらうようになり、見物ありきの「祭礼」と化しているものが多く見られるようになってきているからだ。よって柳田の用法を参考にしつつ、混同しないように本論では「祭」を神事、「祭礼」をイベントと区別して用いる。

小松和彦によると「祭りとイベントの大きな相違は、神の祭祀の有無にある」（小松 1997；21）。小松がいう「祭り」とは本論でいう神事である。祭りは「祭りの信者・担い手のための：行事であり、信者によっていっさいが担われる」（小松 1997；21）。この「祭り」は「経済的効果を期待していない」（小松 1997；21）。一方、イベントはこれとは大きく異なり、「イベントでは、主催者が意識するのは、『神』ではなく『客』である。主催者は客の

*指導教員：植田今日子

反応を一番に気にする。イベントを楽しむのはこの客であって、主催者・出演者はこの客を満足させる」(小松 1997; 21) のものであると述べている。これを参考にしつつ筆者なりに神事とイベントがどういうものを指すのか定義しておきたい。神事は神社や各家庭が行う神が関与する祭りのことである。当然のことながら見物がいなくても成り立つ。一方、イベントは社会的に広く行われている催しであり、神や氏子等が関与せず、人々が人々のみで行うもので、見物が多くいることが求められる祭りのことである。本論ではこのような意味で「神事」と「イベント」という言葉を用いる。

近年、この神事、イベントの継承方法の多様化が見られる。昔からの伝統的神事を忠実に守り続けながらも、後継者不足や若者離れの対策として神事を現代に合うようにイベント化して今日まで継承を続ける例もある。

本論の事例地である山形県寒河江市では、伝統的の神事が行われる寒河江八幡宮の例大祭と、寒河江市のイベントである「神輿の祭典」が同時期に行われている。

寒河江八幡宮は 800 年以上の歴史を持ち、例大祭は鎌倉時代の建久 2 年(1191 年)に神霊を勧請した寒河江八幡宮の歴史と共にある。現在、神事として流鏝馬、凱旋奴、太々神楽、神輿渡御等が行われており、毎年 9 月 14・15・16 日に挙行されている。

一方「神輿の祭典」は寒河江市民のイベントとして誕生した寒河江まつり最大の催事であり、本社神輿、子供神輿、地域神輿、企業神輿等が一緒になった東北のイベントの中でもひとときわ大きいものである。本社神輿とは、寒河江八幡宮の神輿のことを指しており、実は「神輿の祭典」に八幡宮が関わっていることが分かる。

この「神輿の祭典」は、5 年前までは八幡宮の例大祭と同じ毎年 9 月 15 日に行われていた。現在は担ぎ手の都合を優先し、9 月の第 3 日曜日に行われている⁽¹⁾。しかし例大祭の日程が 3 連休になり担ぎ手に好都合の場合は、出来る限り八幡宮の例大祭の日に合わせて催行されている。さらに寒河江八幡宮例大祭期日である 9 月 14・15・16 日は、7 年に 1 度、9 月第 3 週にかかり、例大祭の一大行事が行われる 15 日が「神輿の祭典」の日と重なるようになっている。つまり 7 年に一度必ず交わる神事とイベントなのである。

このように寒河江では、神事とイベントという全く性質の違うものが寄り添っているといえる。具体的には、八幡宮の神輿が「神輿の祭典」に出ている点、また寒河江八幡宮例大祭の期日と「神輿の祭典」の開催日が可能な限り同日になるようにしている点である。性質の異なる神事とイベントが寄り添っていくのはなぜなのだろうか。本論では、市民のイベントが神事に近づいていく動きを追い、なぜイベントが神事に近寄っていくとするのかを明ら

⁽¹⁾ 日程が 9 月第 3 日曜日が変わっているが、長年八幡宮の例大祭に合わせるべきだという意見があり、議論は平行線をたどっている。

かにしたい。そして現代の多様な神事とイベントの共存のあり方について考えてみたい。

2. 先行研究

ここでは近年見られる神事のイベント化について、これまでどのように論じられてきたのかみていきたい。高度経済成長期以前までは、イベントよりも、伝統的の神事が日本の各地で盛んに行われてきた。実際に農業にたずさわる人たちが、五穀豊穡を祈願する等、「祭り」（伝統的の神事）は「祀り手たちが自分たちのために行う、生きるための切実な行事であった」（小松 1997； 10）ため、神事は人びとの生活に浸透していた。また一般的に広く「祭り」と呼ばれているものは古くからハレの場とされてきたが、ハレの日は「その主催者と参加者たちが一堂に会して共飲共食し、贈り物を交換し、それを通じて共同体成員であることを確認する場」（小松 1997； 9）でもあった。しかし高度経済成長を潮目とする時代変化により、「賃金労働者への転職、農機具の機械化とその家財化など」（小松 1997； 11）で、「生業を基礎とした共同体意識の強化・確認の場としての」（小松 1997； 11）祭りの機能が低下していった。そして現在のような「貨幣経済・消費社会では、ハレの場は消費の場」（小松 1997； 12）という認識が強くなってきている。地元の特産品を売り出し、地域の自慢を前面に売り出し、観光客にお金を落としてもらおうとするイベントがこの一例である。また近年では、地方から都市へ大量の人口流出が起こり、地方の過疎化と共に「過疎地域では、祭りの中心的担い手やその後継者が消えて」（小松 1997； 10）しまい、「祭りを維持したくとも、地域に住む住民の高齢化のために、やむなく祭りを簡略化したり、停止したりせざるをえなくなって」（小松 1997； 10）しまうところが増えている。これらの変化から神事が生活に合致しなくなり、過疎化対策として「地域への人集め」、「経済活性化」を目的とするイベントを創造するようになり、衰退の解決策として神事にイベント的要素を取り入れ継承にこぎつける地域も増えていったと考えられる。

また神事は先に述べたように、神社や各家庭が行う神が関与する祭りのことであるが、関一敏は、現在の神事は「神霊をマツルもとの形からすると、周囲の部外者が見物人として多量に参加するあり方は、参加者がすなわちマツリ手であり担い手であるという原義を離れて」（関 2002； 243）きていると述べる。これを分かりやすく説明するとすれば、これまでの神事の参加者は、皆祀り手、つまり神事を行う者であったが、近年では参加者に祀り手だけではなく、見物という新しい者も現れるようになったということである。これは本来イベントに見られる構造である。イベントにおいては厳密には祀り手といういい方はできないが、例えば神輿イベントにおいて、神輿を担ぐ者に加えてそれを見る者が多勢現れる。このような

状況に似ている。つまり神事がイベント化しつつあるといえるだろう。

神事がイベント化している地域の共通点として挙げられるのは、地元に残りの人が残らないという後継者不足の問題である。神事という古くから継承されてきたものを途絶えさせない為の手段として、イベント化して人々の気を引くことも必要になったのかもしれない。

また多くの民俗学の祭り研究では、神事とは「神霊、神々、ここではカミとよぶ多くは無名の民俗神が一定の区切られた時間と空間のなかに出現し、忌み籠りをへた特権的な人間たちの媒介によってわれわれ俗人との交流をはかること」(関 2002 ; 243)であるとされている。しかしこれも後継者不足と関係して、近年では変化を余儀なくされている。以前はこの「忌み籠りをへた特権的な人間たち」は神社の宮司、また神社の定める氏子区域に住む人々(氏子)であっただろう。しかし新しい町の形成や人々の氏子意識の希薄化によって、神事の担い手である氏子が少なくなっている。その為、現代では担い手を他に求める必要性が出てきている。しかも現代社会ではそれぞれの生活リズムが多様化しており、忌み籠りを経るということはより難しくなっている。このことが限られた者による由緒正しい神事の継承を難しくし、むしろ神事の方を現代生活に合うようにイベント化しながら継承していかざるをえない地域が増えていると考えられる。

本論の調査地である山形県寒河江市の寒河江八幡宮には歴史ある例大祭がある。例大祭はいわゆる神事であるが、この例大祭にも上記のような神事のイベント化が見られる。具体的には祀り手ではない見物が沢山現れ、担い手も氏子に限定しなくなったからである。しかし調査地では、イベントの神事化だけが生じているのではなく、「神輿の祭典」という本来神事ではない地域のイベントが限りなく神事に近づいていっている。神事は神と関わるもので

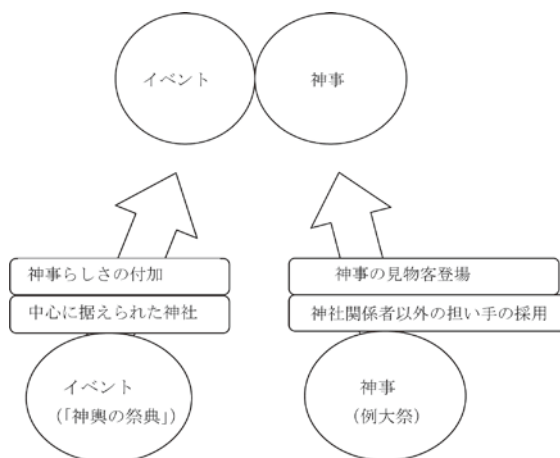


図 1. 神事のイベント化, イベントの神事化

あり、人々の手で簡単に創造したり変化させたりすることははばかれるのが常である。また現代社会において神事のイベント気質が高まる中、イベントが神事化するのは極めて珍しい。いったいイベントが神事化するとはどういうことなのだろうか。神事のイベント化とイベントの神事化が同時に起こっている本論の調査地、寒河江市を対象に、次章から考察を進めていく。

3. 調査地概要

3-1 山形県寒河江市

本論の事例地である山形県寒河江市は「山形県のほぼ中央に位置し、東に奥羽山脈、西に月山、朝日の連峰を望み、南に蔵王、北に葉山を擁して村山盆地を形成する」(1994, 寒河江市史編纂委員会; 2)⁽²⁾。寒河江八幡宮例大祭の氏子となる人口・世帯数を表1に示した。表1は市の人口・世帯と氏子区域の人口・世帯の比較である。まず氏子の意味を確認しておく、「各神社の祭祀圏を構成する住民や世帯」のことであり、氏子区域とは「神社の慣習的な祭



図2. 山形県

マピオンより引用 (2014年6月1日アクセス)

<http://www.mapion.co.jp/map/admi06.html>

⁽²⁾ 面積：139.08 平方キロメートル
 総人口：42,417 人 (2014年6月末現在)
 世帯数：13,488 世帯
 寒河江市市役所 HP より引用 (2014年6月1日アクセス)
<http://www.city.sagae.yamagata.jp/docs/2011082400013/>
 寒河江市市役所資料「寒河江市町会別世帯人口調」参照

表 1. 市の人口・世帯と氏子区域の人口・世帯

| | | | |
|------|-----------|---------|----------|
| 市の人口 | 42,417 人 | 氏子区域の人口 | 18,592 人 |
| 世帯数 | 13,488 世帯 | 氏子区域の世帯 | 6,240 世帯 |

※新しい町の形成によって、明確に旧寒河江町の地区を特定できない為、誤差有
寒河江市市役所資料「寒河江市町会別世帯人口調」より作成

祀圏」のことを指す⁽³⁾。

寒河江八幡宮の氏子区域は旧寒河江町であり、現在の寒河江市から旧寒河江町の区域を割り出すと 18,592 人が氏子に該当する。割合でいえば、市の 43.8% が氏子である。しかし担い手不足から、近年では八幡宮の神事の担い手は氏子に限定せず有志で行っている。その為、実際の祭りの担い手の対象は厳密には特定できない。つまりかつての例大祭は旧寒河江町の氏子が中心となった神事であったが、時代変化によって担い手の対象区域が広がっているといえる。

一方「神輿の祭典」は市民のまつりである為、開始当初から寒河江市民全体が潜在的参加者となる。これに加え、他県の団体の参加もあり、例大祭より参加地域がさらに広がっている。

3-2 寒河江八幡宮例大祭の歴史と変遷

寒河江まつりができる前、寒河江の最大の祭は、寒河江荘の総鎮守であった寒河江八幡宮の例大祭であった。記録が残っていない為明確なことはいえないが、寒河江八幡宮の例大祭は寒河江八幡宮の歴史と共にあり、かれこれ 800 年以上の歳月を経ていると考えられる。歴史ある例大祭だが、時代の変化によって大きく姿を変えてきた。

「寒河江八幡宮の祭は、正徳年間（1711 年～1716 年）ころから神輿が町を巡るという形態をとるように」なった。また「文化・文政のころは、さらに寒河江の各町や富豪層は「山車」を出して祭礼を盛り上げた」が、この山車は明治時代頃にいつのまにかなくなった。「近代に入ると、神輿に武者行列と奴がつく。奴は「凱旋奴」と称し、六供町の猛者組が担当した」（八幡宮 HP より）。この凱旋奴とは、戦いから帰ってきた武士を表すものである。奴の行列は現在まで途絶えず続いている。昔は六供町の若衆が行っていたが、現在は担い手不足に対処する為、氏子に限定することなく、有志が集う奴保存会によって継承がなされている。

また現在、「神事作試し」と称され行われている流鏝馬は、「鎌倉武士に好まれた武芸訓練

⁽³⁾ コトバンクより引用（2014 年 8 月 12 日アクセス）
<http://kotobank.jp/word/%E6%B0%8F%E5%AD%90>

の行事であり、古地図にも馬場道として記されており、起源は中世にさかのぼると見てよい」(1994, 寒河江市史編纂委員会; 8, 9) と市史にはある。八幡宮は幕府の鎮守になってから、八幡神が武士社会で信仰を集め、武士の守り神として各地に勧請されてきた。寒河江八幡宮の根源である宇佐八幡宮で行われている流鏝馬が伝わり、もともとは武芸訓練としての意味を成していたと考えられるが、時代変化と共に武士が少なくなり、武芸訓練としての意味を成さなくなった。その為「寒河江郷の農民騎士によって競馬(くらべうま)の形態で行うように変わっていった。しかも神事として『一の馬』・『二の馬』・『三の馬』の三頭で、それぞれの勝ちによって来年度の稲作の豊凶を占う内容となった」(1999, 寒河江市史編纂委員会; 561) と市史にある。

他にも巫女舞太々神楽という古くから舞われてきた神楽がある。この神楽の奉奏は実際に



写真1. 京参乗り

写真1. 2014年9月15日 筆者撮影



写真2. 奴町巡り(凱旋奴)

写真2. 2014年9月14日 筆者撮影



写真3. 流鏝馬

写真3. 山形県HPより引用
(2014年6月2日アクセス)

https://www.pref.yamagata.jp/ou/somu/020020/03/mailmag/series/season/sagaematuri/img_vol241_02.jpg



写真4. 神楽を舞う巫女

写真4. 2014年8月15日筆者撮影

見に行くと、寒河江八幡宮例大祭の中心神事という印象を受ける⁽⁴⁾。かつては六供町の人びと（氏子）が行っていたが、現在は寒河江地域の小中学生が春秋の例大祭で舞っている。

また京参乗り（きょうざぬり）も古くから例大祭に参加する習わしがある。これは都から代官が来る様子を表すもので、「代官様」が来ないとお祭りができなかったことに起因する。その為京参乗りは例大祭の全神事に参加している。八幡神社はお告げがよく当たる神様として幕府からの信頼が強くあった為、代官が赴いていたのだろう。

以上のように寒河江まつりができる前は、寒河江八幡宮の神事が中心となって旧寒河江町全体が盛り上がっていたのが読み取れる。しかし寒河江八幡宮の神事は旧寒河江町の氏子だけでは継続することができなくなり、担い手不足解消のため、他地域の有志が参加できるようになった。寒河江八幡宮の例大祭は古くからの伝統を継承してはいるものの、神事を担う者の姿は大きく変化していたといえる。

3-3 寒河江まつり概要

一方、寒河江まつりは市民のイベントとして誕生した。主に2日間に渡って様々な催し物が行われ、年々これが増加し、やがて寒河江市で最大規模のまつりへと発展した。表2は寒河江まつりの行事一覧である。

寒河江まつりの開催日は5年前までは八幡宮の例大祭に合わせて9月14・15・16日に行われ、「神輿の祭典」の開催日は15日であった。しかし近年では「神輿の祭典」催行にあたって、準備に3日を要し、勤め仕事をする人にとって平日の実施は困難な為、5年前から第3日曜日へと日程を変更している。

3-4 寒河江まつり「神輿の祭典」の歴史

ここで八幡宮との関わりが生まれた、寒河江まつり最大のイベント「神輿の祭典」成立までの経緯を見ていきたい。現在行われている神輿イベントは、寒河江を元気で明るい街にしようと、昭和58年（1983年）に社団法人寒河江青年会議所（現公益社団法人寒河江青年会議所）が先頭に立って始めたものである。現在は「神輿の祭典」と呼ばれているが、「熱狂！裸神輿」のタイトルで始まった神輿イベントが原点となっている。

以前は秋田の竿燈祭りや仙台の七夕を借りてきたり、武士や大名等に扮した仮装行列等が

⁽⁴⁾ 巫女舞太々神楽 筆者が2014年9月15日に見学に行ったところ、一般人は本殿で行われている太々神楽を近くで見ることができないようであった。筆者自身、本殿の外から覗いたが、様子がかすかに見える程度であった。普段下してある神座の前の御扉が開かれ、供え物を御扉の先の階段から神座へ運んでいる様子が伺えた。神社の宮司、その他神社の関係者によって祝詞を唱え、お供えをし、その後小中学生が神楽を舞うようであった。

神事化する地域イベント

表2. 寒河江まつりの行事一覧

| 1 日目 | 2 日目 | 3 日目 |
|----------------------|---|---|
| 焼き鳥 Bar (バル) 出店広場 | 奴町巡り 臥龍太鼓町巡り 寒河江八幡宮前夜祭 寒河江八幡宮流鏝馬神事 うまい大鍋フェスティバル | 奴町巡り 臥龍太鼓町巡り 寒河江八幡宮流鏝馬神事 ふるさと芸能まつり 寒河江八幡宮例大祭 (太々神楽奉奏) 神輿の祭典 |

寒河江市役所 HP (<http://www.city.sagae.yamagata.jp/>) より作成

表3. 寒河江まつり「神輿の祭典」誕生までの流れ

| | |
|---------|---|
| 昭和 58 年 | 「熱狂！裸神輿」開始 |
| 昭和 62 年 | 寒河江青年会議所が設立 20 周年記念事業として「本神輿」を建造 ※この年まで裸で樽神輿を担ぐのが主流だった |
| 平成元年 | 寒河江神輿會発足 |
| 平成 9 年 | 事務局が青年会議所から寒河江神輿會へ移行 「熱狂！裸神輿」が「神輿の祭典」に名称変更 |
| 平成 11 年 | 全国スポレク祭山形に参加 |
| 平成 14 年 | 全国都市緑化フェアに参加 |
| 平成 16 年 | JR 寒河江駅前に「神輿会館」がオープン |
| 平成 21 年 | 八幡宮で出陣式を行うようになり、渡御コースも変更 |

寒河江神輿會 HP より作成 (2014 年 4 月 16 日アクセス) <http://mikoshi.r-cms.jp>

行われていた。しかし借り物でなく、市民が盛り上がる寒河江の祭りをやりたいと寒河江青年会議所が中心となって「子供をだしにして大人も呼べる」神輿を提案した。当初は裸で神輿を担ぎ、競い合って相手の襷を最も多く取ったものが、翌年寒河江八幡宮の由緒ある神輿「六角神輿⁽⁵⁾」の渡御を担うという内容が構想され、実施された。

⁽⁵⁾ 六角神輿 本社神輿（八幡宮の御神体を入れる神輿）の1つで昔から伝わってきた神輿。六角神輿は昔から日中町巡りで担がれているもので、夜に担げるように宮司さんをお願いして寒河江まつりの神輿イベントで第3回から第5回まで担がれた。



写真 13. 六角神輿

(2014 年 8 月 4 日筆者撮影)

昭和 62 年，寒河江青年会議所が設立 20 周年記念事業として神輿を建造し，以後，市より地域活性化資金が出されるようになった。それを機に各地で次々と「本神輿⁽⁶⁾」が建造されるようになり，神輿イベントの参加団体が瞬く間に増加した⁽⁷⁾。

各団体の関係図を図 3 に示した。神社の例大祭神事の担い手である流鏝馬保存会，奴保存会，氏子青年神輿会は神社組織であり，例大祭に関わる団体である。一方，「神輿の祭典」

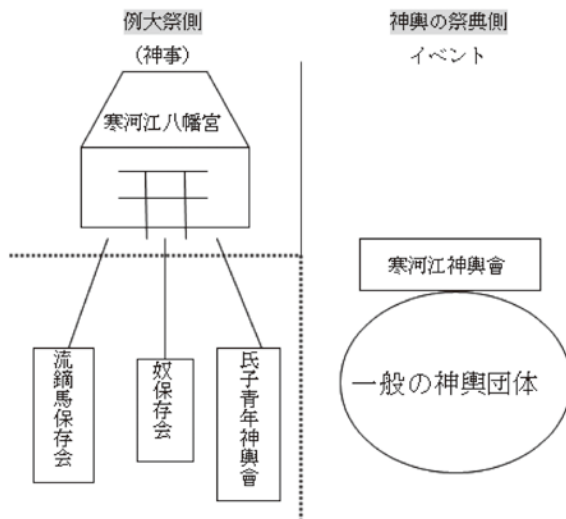


図 3. 八幡宮例大祭, 「神輿の祭典」の関係図



写真 5. 高木美龍會の神輿



写真 6. 氏子青年神輿會と宮司

写真 5, 6. 寒河江神輿會フォトギャラリーより引用

http://mikoshi.r-cms.jp/photo_list/?pageID=2 (2014 年 6 月 2 日アクセス)

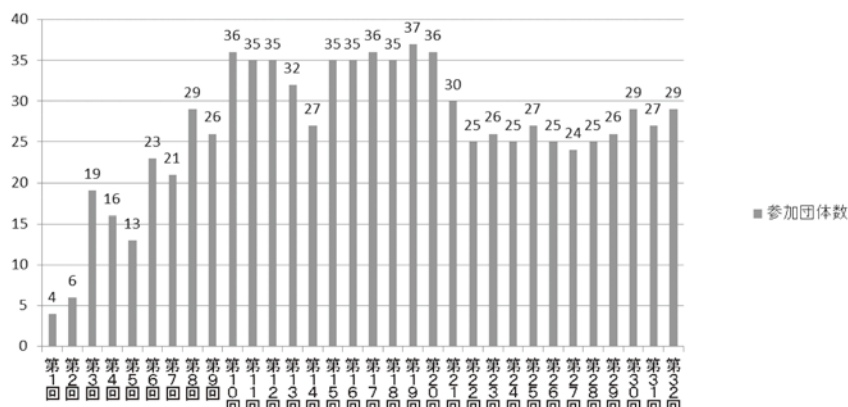
⁽⁶⁾ 本神輿 各地域で大人の団体が作った神輿の通称。昔は企業神輿等と区別していたが現在は子供神輿や本社神輿以外の神輿を広く本神輿と呼んでいる。基本的に 1 団体 1 基しか作らない。

⁽⁷⁾ 寒河江神輿會 HP (2014 年 4 月 16 日アクセス) <http://mikoshi.r-cms.jp>
6 月 13 日寒河江神輿會聞き取り調査参考

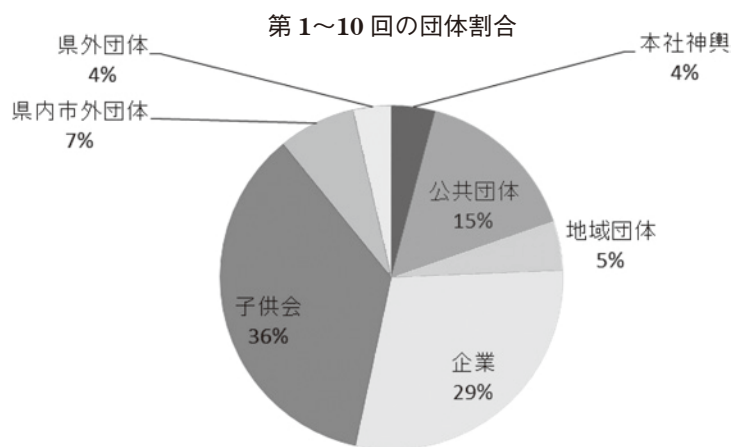
の運営，統括をしているのが寒河江神輿會であり，その他一般の参加団体と共に「神輿の祭典」を作り上げている。また神社組織である氏子青年神輿會は実は「神輿の祭典」でも神社神輿を担いであり，「神輿の祭典」に参加する団体との交わりがある。

ではこれまでの神輿イベントへの参加団体を見ておこう。グラフ1は参加団体数の推移(第32回(平成26年)まで)，グラフ2～4は参加団体の種類別割合(第32回(平成26年)まで)を表したものである。

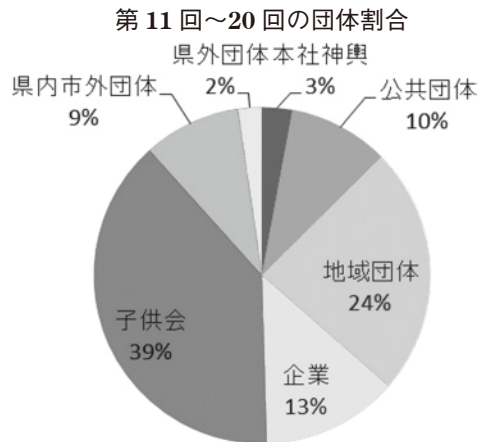
グラフ1から分かるように，4団体から始まった神輿のイベントが第11～20回をピークに現在でも約30団体が参加する大規模なものとなっている。「神輿の祭典」がこれほどまでに大きくなった要因は，寒河江神輿會會長(平成9年～平成20年)の安孫子孫兵衛氏によ



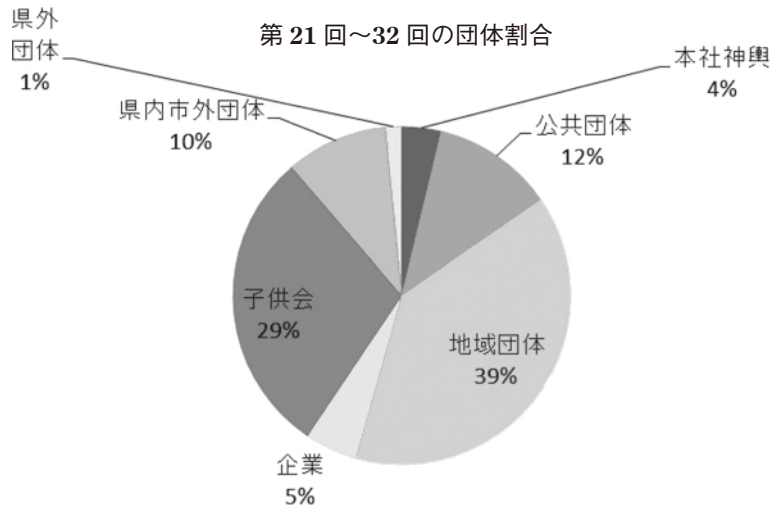
グラフ1. 「神輿の祭典」参加団体数の推移



グラフ2. 第1～10回の参加団体の種類別割合



グラフ 3. 第 11 ～ 20 回の参加団体の種類別割合



グラフ 4. 第 21 ～ 32 回の参加団体の種類別割合

※地域団体は子供会を含まない町内会や地区、また有志で形成される神輿団体のことを指す

ると「各町内会でやっている多くの子供神輿」と「姉妹都市である寒川町の『^{はまおり}浜降祭』の影響」だと言う（寒河江神輿會，2002）。1つ目の子供神輿が多い要因とは、もともと寒河江には酒屋が多かった為、樽神輿を作ることができたことによる。酒樽の神輿はお金をかけずに作ることができ、解体も簡単である。その為、子供の神輿に用いられることが多く、市内でも地域活性化の手段として子供神輿を始める地域が増えたと考えられる。また市の地域活性化資金が出されるようになると、この時期にさらに神輿への関心が高まり、今度は酒樽の神輿ではない神輿が建造されるようになる。それによって毎年継続して参加する子供会が増

えていった。

2つ目の要因として挙げている姉妹都市神奈川県寒川町の「浜降祭」は、「神輿の祭典」を形作った重要な神事である。寒河江まつりに神輿のイベントが構想され、寒河江らしい祭りとして1年目に行われた裸で樽神輿を担ぐやり方は、てっとり早くお金をかけずにまつりを盛り上げようと考えられたものであった。当時は試行錯誤の末「とりあえず」でやっていたが、裸で樽神輿を担ぐ構想では満足できず、本場の神輿を寒川町まで見に行くことにした。寒川の「浜降祭」関係者からは主に担ぎ方や会の運営方法、雰囲気に至るまで教わることになった。神輿の造り方や運営方法が寒河江で共有されるようになると、神輿団体は増加し、「神輿の祭典」は大きな神輿イベントへと成長していった。

しかしグラフ2~4からは第11~20回をピークに子供神輿は減少傾向にあり、企業神輿も年々減少していることが分かる。子供神輿と企業神輿は時代の影響を受けやすく、少子化や景気が関係していると考えられる。それに対し、地域団体は近年増加傾向にあり、神社神輿は毎年必ず参加している。このことから「神輿の祭典」は「熱狂！裸神輿」開始当時のように企業の神輿が先頭を切って、沢山の子供神輿がそれにつづく形態ではなくなっていることが示されている。現在に至るまでに、各地区の神輿団体と神社神輿がけん引する、寒河江の地域イベントに変化してきたことが読み取れる。

4. イベントと神事の差別化と融合

4-1 イベントと神事の差別化

繰り返しになるが、今一度本論で扱うイベントと神事を簡単に整理すると、もともと神事ではないイベント「神輿の祭典」と伝統的神事である八幡宮例大祭は、それぞれ別々に誕生し、それぞれの歴史において時代に合わせた変化を遂げてきた。そして「神輿の祭典」は寒河江神輿會が主導し、例大祭行事は宮司や氏子青年神輿會等の有志団体によって行われてきた。ここで改めて考えてみると、イベントである「神輿の祭典」は約36団体が参加する程の大きなイベントに成長したにも関わらず、なぜ八幡宮の例大祭とわざわざ同時期に開催するようにしていたのか、という疑問につきあたる。

その理由を先取りして述べれば、あくまで地域を元気にするイベントとして誕生したのだから、地域性を失わないようにする必要があったということである。グラフ2~4を見ると、急激な上昇は見られないが、県内市外団体や県外団体の参加がほぼ一定にとどまっていることが分かる。また、「神輿の祭典」の特徴として挙げられる、担ぎ方、神輿の種類が多様な点からは、他地域の文化が混在しており、地域性が分かりにくくなってきていることも浮か

表 4. 神輿, 担ぎ方の種類

| 神輿の種類 | 担ぎ方 |
|-------|----------------|
| 宮神輿 | ソイヤー (江戸前三社祭り) |
| 万燈神輿 | ドッコイ (湘南) |
| | わっしょい |

※この種類, 担ぎ方の多様性は一般の神輿団体のこと



写真 7. 宮神輿



写真 8. 万燈神輿

写真 7, 8. 寒河江神輿會フォトギャラリーより引用 (2014 年 7 月 7 日アクセス)

http://mikoshi.r-cms.jp/photo_detail/id=11&type=&search_id=&season=

び上がっている。表 4 を見ると、「神輿の祭典」では神輿の種類, 担ぎ方が多様で, 1 つに統一されていないことが分かる。

なぜ多様な担ぎ方がこの土地で受け継がれているのか疑問に思い、「神輿の祭典」を統括する寒河江神輿會會長石沢信一氏 (以下神輿會石沢氏) に聞きとりを行った。神輿會石沢氏は「一般的には, まつりを継続させていくためには掛け声や担ぎ方を統一するが、『神輿の祭典』では継続させていくことを想定しなかった為に, このような多様な神輿となった^⑧」と述べていた。何もない状態から神輿イベントを作り上げるにあたって, 他地域のやり方を真似るといふことは不可欠であった。しかし寒河江の場合, その真似る他地域が, 姉妹都市神奈川県寒川町だけではなかったのである。

けれども寒河江を元気にする為, 寒河江らしさを求めて始められたイベントが, 制限をかけないまま, また継続させることを想定せずに続けられてきたことで, 皮肉にも地域性を失

^⑧ 担ぎ方が多様化した背景 最初に神輿を作った寒河江青年会議所は姉妹都市神奈川県寒川町の担ぎ方を習ってドッコイ神輿を始めた。次の年, 南部地区の神輿を建造し, ドッコイ神輿でようになった。しかし陵友睦会という陵東中学校, 陵南中学校の OB の若者の多い団体が担ぎ方を他と変えて目立たせようと考え, 江戸前神輿を持ってきた。その流れによって各団体が自由に担ぎ方を選ぶという形が出来上がり, 現在に至っている。

いつつあったといえる。そこで近隣地域において長年信仰されてきた神社の神事と一緒に
 行うことで、寒河江らしさという地域性の創出が図られていたのである。寒河江八幡宮の神事
 は、古くからの寒河江の特色や伝統を色濃く有しており、地域性と歴史を感じられる地域の
 宝である。つまりここでいいたいのは、八幡宮を中心にするすることで、他地域の参加を歓迎し
 ながら地域性を守ることができているのではないかということである。だが忘れてはならない
 のが、あくまで神社は神事を行うものであり、観光目的や地域起こし等で神事を行っている
 のではないということである。神事の開催日は変えられないし、古くからの伝統をなるべく
 そのまま継承していく必要があり、イベントの都合にあわせて共存していくには難しい点
 が多い。一例を挙げるとすれば、例大祭は古くから行われてきた期日に行うものであり、私
 たちの都合で簡単に開催日を休日に変更できない。このようにイベントと神事を共存させて
 いくのが難しいのは、そもそも神事が市民の催事と同様になってはいけなからである。そ
 の為イベントである「神輿の祭典」の内部においても、市民一般団体と寒河江八幡宮の神社
 神輿には、一定の距離が保たれている。次の表は神社神輿とその他団体との線引きがなされ

表5. 「神輿の祭典」における神社神輿と一般団体との線引き

| | |
|---|---|
| 1 | 例大祭より前の日に「神輿の祭典」は開催しない |
| 2 | 寒河江八幡宮の神輿は「神輿の祭典」で必ず最初か最後に担がれる |
| 3 | 神社神輿は氏子青年神輿会 ⁽⁹⁾ が担ぐ。志の高いものは禊 ⁽¹⁰⁾ を行い、必ず白装束に身を包んだ人しか担ぐことができない。 |
| 4 | 氏子青年神輿会に所属する人は他団体に担ぎに行くことはない |
| 5 | 「神輿の祭典」では寒河江八幡宮の六角神輿は担がれない |
| 6 | 神社神輿は一般団体とは違う担ぎ方をする |
| 7 | 寒河江八幡宮の神輿にのみ御神体を入れる |

⁽⁹⁾ 氏子青年神輿会 日中行われる神輿町巡り、「神輿の祭典」において神社の神輿を担ぐ有志の団体。氏子ではなくてもこの會に入り、担ぐことができる。一番多い時で140人くらい會に所属していた。現在は40～50人が所属。氏子青年会は普段神社清掃とか奉仕活動も行っている。日中神輿渡御、「神輿の祭典」前は一部有志が禊をしている。今後の課題は所属人数を増やすことと會の意識を上昇させて、奉仕活動・禊への参加へ結び付けたいと考えている。

⁽¹⁰⁾ 禊 例大祭前の1週間、早朝に神社の禊池に入り身を清める。



写真14. 禊池



写真15. 鳥船行事の和歌を斉唱



写真16. 禊池で身を清める

写真14, 15, 16. 2014年9月9日筆者撮影

ている点をまとめたものである。

神輿會の石沢氏への聞き取りの中でも、神社に対して「踏み込めない何かはある」「口にできないことはある」と述べられていた。神社は特別なものという認識があることは表5からも明らかであることが分かる。表5の3「神社新輿は氏子青年神輿會が担ぐ。志の高いものは禊を行い、必ず白装束に身を包んだ人しか担ぐことができない」からは神社の神輿は他団体とは違い、簡単に担げる状況にたくないという氏子青年神輿會の意向が読み取れる。表5の5「『神輿の祭典』では寒河江八満宮の六角神輿は担がれない」には興味深い背景があるのでここで紹介したい。神輿イベントの最初の3年間は六角神輿が担がれていた。しかし貴重なものであり、激しく神輿が揺れる「神輿の祭典」では壊れてしまうと困るということで、1989年にわざわざ新しく神輿(=大神輿)が新調されたという。現在は大神輿が八幡宮の神輿として「神輿の祭典」で担がれるようになっている。唯一御神体を入れる神聖な神輿であることに変わりはないのだが、古くから伝わる神事に使われる神輿が担がれない点は、イベントと神事を隔てる大きな線引きではないだろうか。また表5の6にある神社神輿の担ぎ方には特にスタイルはなく、静かに、あまり揺らさないようにというのがだいたいの形だという。ドッコイヤソイヤーとは違い、イベントの場であっても、ある程度厳かにやっているようだ。その大神輿とは、写真9、10のような普通の神輿よりもはるかに大きい神輿である。その点から神社として他と差別化しておきたいということが読み取れる。

これらの差別化からイベントである「神輿の祭典」と神事である八幡宮例大祭には、2つの境界線が存在していることが見えてきた。1つは「神輿の祭典」と例大祭の間にある〈境

神事等の開始時間の関係で1、2日目5時30分、3、4日目5時15分、5日目5時、6日目4時15分、7日目4時と早くなっていく。早朝、寒河江八幡宮本殿前に禊をする者は集まる。境内を一周し、禊池の前で二拝二拍手一拝の後、鳥船行事、雄健行事、雄結行事、氣吹行事、禊行事を繰り返す。禊が終わると、神社の各場所で拝する。その後本殿で神棚拝詞等を詠む。



写真 17. 境内各場所での参拝



写真 18. 本殿で詞を詠む

四足を食べると流鏑馬の騎手が落馬するという言われから、禊をする者は肉を食べてはいけない。



写真9. 「神輿の祭典」での大神輿の様子

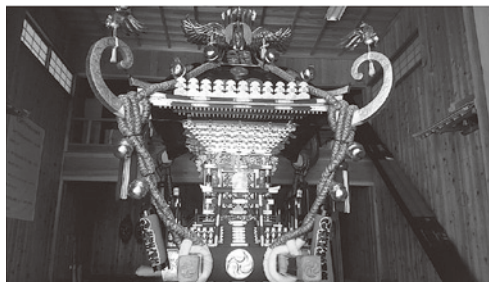


写真10. 神輿倉に保管されている大神輿

いい祭りニッポンより引用 (2014年7月8日アクセス) (2014年8月4日撮影)
<http://www.ematsuri.ne.jp/detail.html?eid=93>

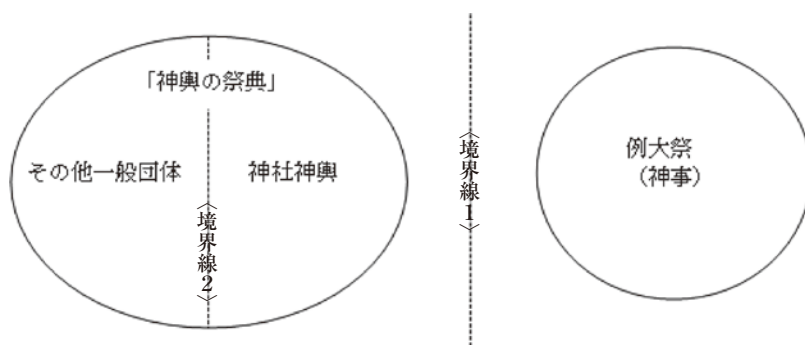


図4. イベントと神事の〈境界線1〉と「神輿の祭典」内での〈境界線2〉

界線1〉である。表5の1の例大祭より前の日に「神輿の祭典」は決して開催しない点、5の伝統ある六角神輿を「神輿の祭典」で担がない点等がこの〈境界線1〉を作っている。またもう一つは「神輿の祭典」内での神社神輿とその他一般団体との〈境界線2〉である。表5の2の寒河江八幡宮の神輿は「神輿の祭典」で必ず最初か最後に担がれる点、3の神社神輿は氏子青年神輿会しか担ぐことができない点、7の神社神輿にのみ御神体を入れている点等が二つ目の〈境界線2〉を作っている。図4は前述の境界線を図示したものである。このように神事とイベントの間に、2つの見えない境界線が存在しており、これらによって神事とイベントが完全に一体化したり、重なることは決してないよう図られているのである。

4-2 イベントと神事の融合

ここまで神事とイベントには2つの境界線が存在しており、両者が完全に交わってはいないということが分かった。しかし神輿とイベントは互いに差別化する一方で、お互いに近寄り、融合しつつある状況にもある。ここからはイベントと神事が融合している側面に光をあ

表 6. 「神輿の祭典」において神社神輿と一般団体が近づいていると感じられる点

| | |
|---|---------------------------------|
| 1 | 神が宿るとされる紙垂渡しを市内全団体に行う |
| 2 | 本来神事ではない「神輿の祭典」に神社神輿（大神輿）を出している |
| 3 | 大きく派手な大神輿は他との差別化の一方で魅せる神輿になっている |
| 4 | 神社神輿の担ぎ手は氏子とは限らない |



写真 11. 紙垂渡しの儀

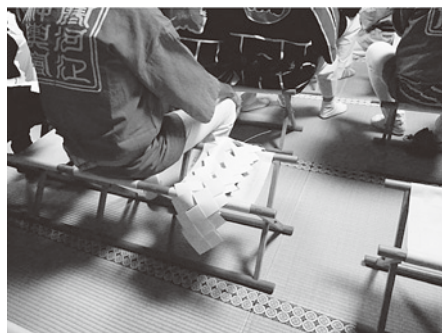


写真 12. 紙垂

写真 11, 12 2014 年 9 月 13 日 筆者撮影

てていきたい。

表 5 の 7 にあったように、「神輿の祭典」では御神体を神社の神輿にしか入れないことになっている。しかし寒河江八幡宮は、神様が宿るとされる紙垂^{して}を「神輿の祭典」に参加している市内全団体に渡している（表 6 の 1）。寒河江八幡宮は例大祭の前日である 13 日に紙垂渡しの儀を行い、別のイベントであるはずの「神輿の祭典」当日に参加団体はこの紙垂を付けて臨む。

紙垂は神社から付けるように言われているのではなく、「神輿の祭典」実施主体である神輿会の側が毎年神社に頼んで配布してもらっている。神輿会石沢氏によると、紙垂の意味としては「けがをしないように、みんなで楽しくできるように」という意味合いがあるそうだが、神の気が宿るとされる紙垂を付けるということは「神輿の祭典」において神は寒河江八幡宮の神に統一されていることを形式的に示しているとも言える。2014 年「神輿の祭典」での参与観察において、実際に紙垂を付けているのは市内の団体のみであることが判明したが、神輿会石沢氏になぜ市外の団体が付けないかと質問してみると、「付けてというのはおこがましいから」だと話す。ここにも意図せずにはあるが、他神を交えず、市内の団体は八幡宮のもとに統一されており、あくまで寒河江市のイベントであることが印象づけられている。

すでに日本各地において、神社神輿が集結するイベントはよく見られるようになってきたが、「神輿の祭典」では寒河江八幡宮の神輿が御神体の入った唯一の神社神輿であり、市のイベントにもかかわらず、他団体が神社神輿を盛り上げているかのような構図になっていた。このような構図は、「神輿の祭典」での渡御順が必ず神社神輿が最初か最後にくるということや、「神輿の祭典」のフィナーレにおいて、神社神輿が神輿団体全団体の中心に位置して一斉渡御していることに見出すことができる。本来は「神輿の祭典」はイベントであり、神社の祭り（神事）ではない。主役となる神輿が神社神輿である必要はないのである。にもかかわらず、市内外から参加の約36基の神輿の中で、神社神輿が花形となっているのである。「神輿の祭典」に神社神輿が出るということは、必然的に神事的な要素が入り混じったイベントとなることは明らかである。また表5で述べたが、現在神社神輿を担いでいるのは氏子青年神輿會であり、所属する人は旧寒河江町に住む氏子だけに限らない。神社神輿は禊を行った者が望ましいとされてはいるものの、担ぎ手はあくまで有志であり、この点においては「神輿の祭典」の一般団体と何ら変わりはない。また表5にもあったように、「神輿の祭典」で六角神輿を担いでいないのは、壊れない為とされているが、これによって意図せずとも神事とイベントに明確な線引きがなされているといえる。つまり例大祭で担がれる神社神輿（六角神輿）ではない神社神輿（大神輿）をイベントに出しているのも、やはり「神輿の祭典」は神事とはいえない。しかし裏を返せば、神社の神輿である大神輿が、「神輿の祭典」の為にわざわざ建造されており、しかも大きく華やかな魅せる神輿になっている点で、神聖な神輿ではあるものの、同時にイベントらしさを感じさせてもいるのである。

4-1では神事とイベントが一緒に行われる中、線引きがなされている点、4-2では神事がイベントに類似している点、イベントが神事に類似している点を挙げてきた。4-1、4-2から言えることは、寒河江八幡宮例大祭がイベント化しつつあり、「神輿の祭典」は逆に神事化しつつあるということである。一方で線引きをしつつ、もう一方で融合し、複雑化している神事とイベントは、これまでいったいどのように共存してきたのだろうか。次章からは神社、イベント両方の立場からの聞き取り調査をもとに、両者にとってのイベントと神輿の意味するところをふまえながら各々の葛藤とともに考察していきたい。

5. イベントと神事が共存する難しさ

5-1 神社中心の市民イベント

冒頭で、日本の各地では神事をイベント化し、継承にこぎつけている地域が増加しているということを述べた。これまでの節で事例地でも確かに神事がイベント化している実態が見

えてきた。しかしこの事例では同時に、イベントに参加する神輿が紙垂を付ける等、イベントが神事に近寄っている動きも見えてきた。そもそもなぜイベントの神事化が起こっているのだろうか。聞き取り調査で神輿会石沢氏に筆者が初めに質問したのは「なぜ神社を中心に『神輿の祭典』を行っているのか」ということであった。これに対し、神輿会石沢氏は「神社を中心にやろうとしてきたわけではない」と答える。石沢氏の語りによると、「神輿の祭典」の始まり、つまり「熱狂！裸神輿」として行われていた頃は、神社のような立派な神輿があると格好がつくだろうと考え、神社に神輿を出してもらえるように頼んだそうだ。神社が神輿を出すことによって「熱狂！裸神輿」は活気づく。そして後に当初の4基の神輿では物足りなくなり、東北で一番の神社神輿を作ろうと大神輿を建造する。このような新しい神輿の登場は、一からスタートした寒河江の神輿イベントを大きく成長させていった。

イベントが成長するにつれて、祭りの開催日も変化していった。5年前まで「神輿の祭典」は平日であっても寒河江八幡宮の例大祭の行われる9月15日に行ってきた。しかし「神輿の祭典」の参加団体数の増加と、充分すぎるほどの盛り上がりによって、神社の例大祭に頼ってイベントを行う必要性はなくなっていった。そこで人びとが求めるようになったのは、休日に「神輿の祭典」を行うことであった。イベントに参加する多くの人は勤め仕事に従事した。その為平日に行うと、イベントに継続的に参加することが難しくなる。こうして5年前から「神輿の祭典」は9月の第3日曜日に行われるようになった。

石沢氏はこのような時代に伴うイベントの変化は、私たちイベントを創る側の「エゴ」であり、「その時に自然であるようになってきただけだ」と話した。つまり意図的に神社を中心に『神輿の祭典』を行っているのではなく、イベントを創る側の「エゴでやってきた結果、自然と」神社との関わりが生まれていたのであった。

しかし、石沢氏はこうも述べる。「7年に1度、『神輿の祭典』と例大祭が同日になるけど、その時には例年よりも祭り自体が盛り上がる」。「祭りをしている側も見ている側もどこが参加しているかよりも楽しいことが一番ではあるけれど、『神輿の祭典』に神社の神輿はなくてはならないものだね。まだ八幡宮と『神輿の祭典』の関係は模索段階ではあるけど、神社と神輿會がお互いに協力することで歴史ができていき、日にちを揃えていくとか、何か接点を持って一緒になっていくことを願っている」と話していた。

5-2 神事とイベントの開催日による変化と議論

では実際に寒河江まつりと寒河江八幡宮例大祭が同日に開催された場合、別日程での開催とはどのように違うのだろうか。実際に2つが同日に行われた2014年の寒河江まつりの日程を表7に表した。表7の網のかかっている箇所は、寒河江八幡宮の例大祭としての行事で

神事化する地域イベント

表7. 9月7日～9月16日までの日程

| 日にち・時間 | 八幡宮例大祭神事 | 寒河江まつり | 場所 |
|-------------|-------------------|--------------|-------------------|
| 9月7日 | | 成人神輿お祓い・決起大会 | ホテルサンチェリー |
| 9月9日～15日 | | | |
| 早朝 | 禊 | | 寒河江八幡宮 |
| 9月13日 | | | |
| 16:00～ | | やきとり Bar | みこし公園 |
| 18:00～ | | 神輿団体紙垂渡しの儀 | 寒河江八幡宮本殿 |
| 18:30～ | 流鏝馬前日神事 | | 寒河江八幡宮流鏝馬本部 |
| 9月14日 | | | |
| 8:00～20:00 | 奴町巡り | | 寒河江旧市街地 |
| | 神社神輿町巡り | | 寒河江旧市街地 |
| | | 臥龍太鼓町巡り | 寒河江市街地 |
| 16:00～ | 古式流鏝馬 | | 寒河江八幡宮馬場 |
| 17:00～ | | うまい大鍋フェスティバル | みこし公園 |
| 9月15日 | | | |
| 7:00～14:00 | 奴町巡り | | 寒河江旧市街地 |
| | 神社神輿町巡り | | 寒河江旧市街地 |
| 8:00～ | 旭一流内楯獅子踊 | | 内楯地区・長岡観音・寒河江八幡宮等 |
| 12:00～16:00 | | みちのく芸能まつり | みこし公園神輿会館 |
| 14:30～ | 寒河江八幡宮例大祭(太々神楽奉奏) | | 寒河江八幡宮本殿 |
| | | 臥龍太鼓町巡り | 寒河江市街地 |
| 16:00～ | 古式流鏝馬・作試し流鏝馬 | | 寒河江八幡宮馬場 |
| 17:30～21:00 | | 「神輿の祭典」 | 寒河江八幡宮鳥居前渡御開始 |
| 9月16日 | | | |
| 12:00～ | 終了報告祭 | | 寒河江八幡宮 |

ある。表は7日の「神輿の祭典」決起大会，9日からの禊，16日の報告祭を除き，全て寒河江まつりの行事として『寒河江まつり第32回神輿の祭典2014ガイドブック』に掲載されている日程である。

表7からは市民イベントと神事が組み込まれた一つの大きな祭のような印象を受ける。しかし「神輿の祭典」を統括する寒河江神輿會，寒河江八幡宮は，この寒河江まつりと寒河江

八幡宮の例大祭は、厳密には同一の祭りとして認識していない。「神輿の祭典」を含む市民イベントとしての寒河江まつりと、流鏝馬や奴を含む寒河江八幡宮の例大祭は、全く別物という認識である。日程が毎年合致するわけではないのは、その証拠として挙げられる。しかし両者とは異なる認識をしている団体もある。氏子青年神輿会会頭柏倉洋一氏（以下氏子青年神輿会柏倉氏）は、寒河江まつりの中に流鏝馬等の神事があり、「神輿の祭典」が市民のイベントとしてあるという認識をしており、氏子青年神輿会では一般的認識だと話す。會や立場によってこの神事とイベントの線引きは若干異なるようだ。その為、筆者のような一般市民は、寒河江まつりと例大祭を区別していない人も多く、実際のところ、どの行事がイベントでどの行事が神事かは曖昧になっている。

しかし調査を進めていく中で気づいたことは、この認識の差異は長年「神輿の祭典」と例大祭が寄り添って行われてきたことによって生じる認識の多様化であって、本来はおそらく表7のように「神輿の祭典」というイベントとしての行事と、例大祭という神事としての行事の2つに区分できると考えられる。だがこの差異から読み取れるのは、それだけ神事とイベントが近寄ってきているということである。7年に1度、寒河江まつりが寒河江八幡宮例大祭期日に重なる時だけがこのような一つの祭りのようになるのだが、期日を合わせていた時代の影響が残っており、同一の祭りであるかのように思われているのかもしれない。

また実際、今年（2014年）のような例大祭と「神輿の祭典」が重なった年は表7のように寒河江まつりとして日程が組まれている。石沢氏が例大祭と「神輿の祭典」が重なった時には、いつもより盛り上がると述べていたが、その背景には例大祭の行事が多い為、寒河江まつりとして日程に組まれると、寒河江まつり自体の規模が大きくなったように感じられるのも一つの理由ではないだろうか。例大祭と重なる年は寒河江まつりにとって、盛り上がりが増す絶好の機会なのだろう。そうであるならば、7年に1度ではなく、再び日程を合わせて行うようにすればいいのではないかという素朴な疑問が浮かぶ。

そこで「神輿の祭典」は再び開催日を例大祭の期日に合わせようとしているのかについて尋ねると、石沢氏は「こっちから揃えてとは言えない」と答える。寒河江八幡宮も期日を揃えて欲しいとは言わないし、「神輿の祭典」側も揃えて欲しいとは口にしないのである。石沢氏によると、日にちに関してお互いに口を出さないからこそ寒河江八幡宮と寒河江神輿會がこれまでずっと良い関係を保つことができたのだと言う。しかし寒河江八幡宮宮司鬼海^{みつあき}瑞光氏（以下宮司鬼海氏）に「神輿の祭典」との日程について聞いてみると、開催日の話をしないようにしているわけではないと答えた。しかし鬼海氏は例大祭関連行事の運営面に懸念があるという。特に平日に例大祭が行われる場合、神社神輿の日中渡御で交通整理をする若者を確保しにくい等の問題があるからだ。神社神輿の日中渡御は氏子青年神輿会が担っ

ているが、氏子青年神輿会柏倉氏は「例大祭と『神輿の祭典』が離れてしまうと氏子青年神輿会が困る」と話している。現実的に考えれば、日中の神輿渡御等だけでも「休日に行わざるを得ない日が来るかもしれない」と鬼海氏が話すように、神社側は人手不足の際には日程の移動もやむをえないと考えているのである。つまり寒河江神輿会は寒河江八幡宮に気を遣い、開催日の話題はタブーと考えているが、一方で寒河江八幡宮としては例大祭行事の期日変更は、今後やむを得ないかもしれないと考えており、行事が休日に移動することも想定していた。つまり神社がひそかに日程の移動によってイベントの人手に頼ろうとしつつも、あくまでイベント側は神事を理解し尊重しているからこそ、踏み込んではいけないところには踏み込まない。次節で詳述するが、この近づきつつ完全には交わらない距離感が、イベントと神事の共存を可能にしている。

5-3 八幡宮の例大祭神事の構造

表7の日程にある八幡宮例大祭の行事を実際に見てみると、担い手の変化や見物の出現等の神事のイベント化により、たしかに地域の人びとに開けた神事であることが感じられた。だが同時に古くから継承されてきた神事の中には、見物が容易く見ることができず、厳かな雰囲気の漂う行事も存在する。例えば例大祭の1週間前に行われる早朝の禊では、ふんどし姿の者たちが寒い中禊池に入り、身を清める。この時境内はたくさん見物が現れる流鏝馬の際には感じられない厳かな雰囲気に満たされる。また15日に行われる中心行事の際には、見物は本殿に入ることができず、本殿外から覗くことしかできない。神楽を含むこの行事が

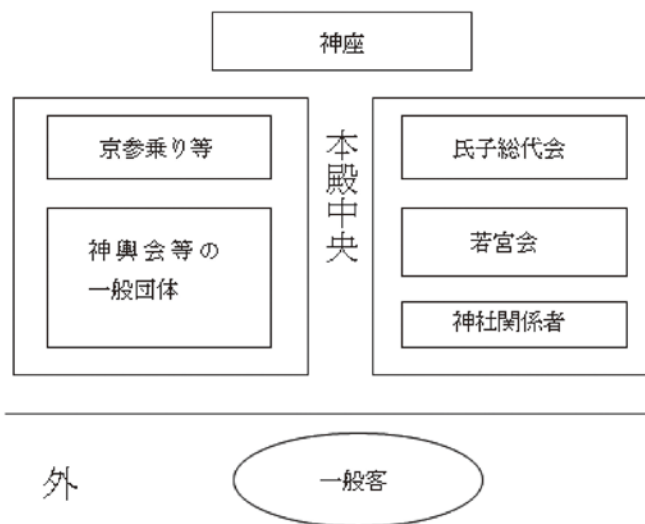


図5. 15日中心行事着席図

例大祭での最重要行事である。柏倉氏への聞き取り調査によれば、特に見物に制限はないが、本殿には座る位置が決められており、そのせいで一般客の居場所がない。図5は神楽の際の座る位置を表した図である。

座る位置が予め決められており、神座に向かって右側が例大祭で中心となって神事を遂行する人、左側は京参乗りを除いて例大祭に直接的に関わりがない人である。左側に着座する人には例えば寒河江神輿会会長、寒河江まつり関係者等がいる。このように位置が決まっているからこそ、一般客は制限されずとも本殿に踏み入ることができないのである。ここには見えない境界線が引かれており、神事の厳粛さが保たれている。つまり例大祭において重要な神事は公開されておらず、構造的にイベント色の強い神事と閉じられた神事とが存在している（図6参照）。

図6に示したのは、イベント色の強い神事、具体的には流鏝馬、奴等、見物が多数現れるものを通じて例大祭がイベントに近寄っている部分、こと。一方で決してイベント化しない部分も残ることで神事としての威厳を保つことができている神事の二重構造である。実際にこの神事の構造は、今後の例大祭神事の期日変更にも影響している。2014年8月の聞き取り調査の段階で宮司鬼海氏は「休日に行わざるを得ない時が来るかもしれない」と話していたが、その後2014年11月に氏子青年神輿会柏倉氏へ聞き取りを行った際は、2015年例大祭としての行事である流鏝馬、凱旋奴、神社神輿日中渡御等が「神輿の祭典」開催日に行われることがほぼ確定している。これらの神事は運営に一般市民が多く関わっている為、9月14・15・16日が平日の場合、人員確保が厳しくなることが要因である。しかし図6で示した閉じられた神事、具体的には例大祭中心神事は、期日を変えず今まで通り9月15日に行われる。この神事の構造が、これまで論じてきたイベント化の動きの根本にあり、今後のイ

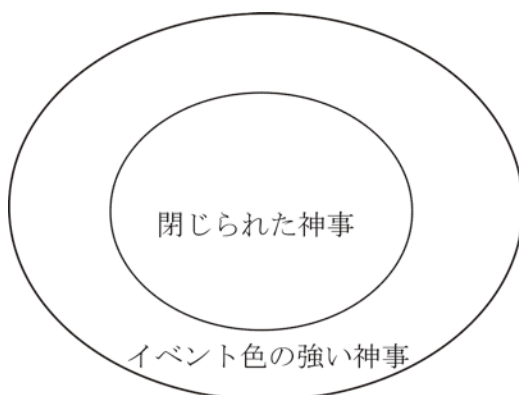


図6. 八幡宮例大祭神事の構造

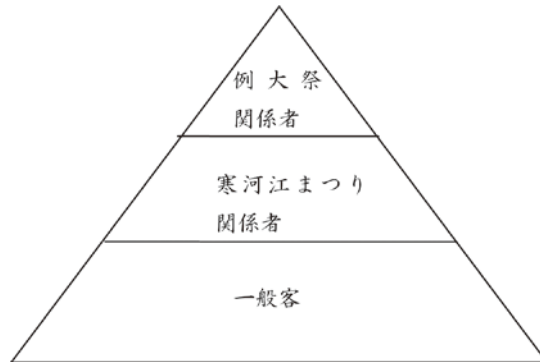


図7. 神事における序列（ヒエラルキー）

イベントと神事の関わり方にも影響していくことが考えられる。

また図7から分かるのは、閉じられた神事の中には序列が存在していることである。一般客がなかなか見られない中心行事を寒河江まつりの関係者は本殿に入って見ることができ、ここから神社側、イベント側の互いの気遣いが感じられ、実はイベント側の地位が比較的高い位置にあることが分かる。

一般客が立入れない閉じられた神事に、地域活性化イベントの関係者が立入ることができるのは、神輿イベント関係者が神社にとって特別な存在であり、神聖な域にも受け入れられるような関係であることを示している。さらに閉じられた神事を見学できることによって、イベント側が神事への理解を深めることができ、それによって踏み込んではいけない境界線をイベント関係者自ら感じ取り、イベント側は神事を侵食せず、共存していくことができるともいえる。

6. 神事とイベントの共存

6-1 イベントの神事化がもたらすもの

近年全国的に急増し、日常的に行われるようになってきた地域イベントの多くは、活性化を目的として行われている。本稿の事例も少なからず地域活性化を探るなかで生まれたイベントである。今やどの地域でも見られるようになった地域活性化イベントであるが、多くはその継続に大きな課題を抱えている。とりわけ若者の都市志向が強い現代では、いかにして担い手としての若者を地域に残し、イベントを継続的にやっていけるかが課題である。

事例地である山形県寒河江市の「神輿の祭典」を含む寒河江まつりは、地域を活発にしようとして始められたイベントであった。しかしイベントを運営してきた人でさえも長続きするよ

うな目ぼしいものがあるとは当初から思っていなかった。しかも時代の移り変わりで人びとの生活が変化していくのに並行して、人びとが求めるものも当然変わっていった。「神輿の祭典」は人びとの要求に沿って刻々と変化していったのである。そもそも寒河江市民の求めるものの中に神社があった。神社の神輿を「神輿の祭典」に出し、例大祭と期日を合わせれば格好がつく。イベント関係者の言葉を借りれば「エゴ」的な考えから神社との関係性が築かれていった。

一方、神社でも時代の変化によって例大祭神事の担い手不足が深刻になっていた。その為「神輿の祭典」との関わりは、新たな担い手確保にも一役買っていた。「神輿の祭典」に神社神輿が参加し、威厳ある神社神輿を人々が目の当たりにすることで、神社神輿を担ぎたいと思う者、神社神輿は「神輿の祭典」において不可欠だと感じる者も増えていっただろう。同日開催し、また市報に寒河江まつりの日程として例大祭神事が載ることで、人びとの例大祭の認知度も上昇する。そうやって神社という存在はイベントに溶け込んでいった。

しかし神事を行う神社は、当然地域活性化を意図して「神輿の祭典」に出ているわけではない。その為、イベントと神社の神事の間には厳密な線引きが多く場面ではなされている。この慎重な線引きによって、イベントと神事が寄り添いながらも、互いに踏み込んではいけなところには踏み込まない関係性ができていった。神事がイベントの片方がもう片方に飲み込まれて潰されるということが生じないためである。いわばイベントと神事は互恵的な関係にある。この見事な棲み分けによって、例大祭神事の衰退を防ぐことができると同時に、イベントもまた長年継続できている。さらに線引きによって人びとに八幡宮の神様の存在が大きく映ることにもなり、結果としてイベントが人びとの関心を神社へ向けさせる効果をもたらした。このような慎重な共存によってお互いに利益がもたらされてたのである。

この事例でイベントに視線をおいて、本論の問いである、「なぜイベントが神事に近寄っているのか」に答えるとするならば、神社の神聖な力を利用できるからということがいえるだろう。神社の神聖な力とは、地域住民からの氏神への日常的な信仰心の力である。寒河江八幡宮は元旦に市民の多くが集まってお参りをする場所であり、交通安全や安産を祈願してもらう場所でもある。つまり市民が日常的に信仰する神社である。市民は何か祈願する場合は当たり前のように寒河江八幡宮を訪れる。この信仰心は奇妙なことに、寒河江まつりの盛り上がりにつながっている。なぜなら寒河江市には寒河江八幡宮例大祭と寒河江まつりが、元々は別のものであったことを知らない膨大な数の市民がいるからである。イベントと神事が長年同日開催されていたこと、また市報に掲載される寒河江まつりの日程の影響（表 10 参照）で、別々の祭りと認識する人は決して多くない。その為、寒河江まつりは流鏝馬や神輿渡御、「神輿の祭典」等が行われる祭りという印象を与える。つまり寒河江八幡宮に信仰

がある者は、自然と寒河江まつりに関心を持つようになっていく。このように日常的な信仰心を味方につけた寒河江まつりは、無いものから無理矢理作ったようなイベントの得体の知れなさを払拭でき、同時にローカルな存在でありつづけることができている。こうしてイベントに神事らしさが付加され、「神輿の祭典」という移植された新しいイベントに人々が寄り添うようになっていったのである。

6-2 地域活性化のあり方

近年全国的に地域活性化を意図したイベントの開催が多く見られる。あらゆる場所で地域活性化が要求される現代において重要となってくるのは、何をもって活性化というのかである。多くの地域活性化イベントでは、観客動員数が多いことや、参加者の意欲が高いことが目指される。平たくいえば「盛り上がる」ことが活性化だと考えられているように思われる。しかし「盛り上がる」ことの追求だけが活性化に繋がるわけではない。なぜなら「盛り上がる」ことだけに囚われると、地域で大切にされてきたものが、それを理解しない人々に破壊される危険性を抱えてしまうからである。そのように考えれば、地域活性化は決して他の地域から人びとを呼び寄せてお金を落としてもらうことだけをいうのではない。自分たちらしさを失い、その地域独自の活力がなくなってしまっただけでは意味がないのである。

本論の事例地は、地域活性化の策としてイベントが神事を利用している例といえる。しかしそれだけではない。同時に神事もまたイベントを利用している。神事が抱える継承者不足の問題を、イベントが解消へと向かわせる。同時にイベントは神事に神聖さを付加されることで、長期的継続へとこぎつけているのである。概して神事とイベントの共存にあたっては、ともすればイベントの観客動員数の多さによって神事がイベントに飲み込まれてしまう危険性がある。しかし事例地では神事とイベントの間に、イベント催行者と神社双方が慎重な線引きをすることで、両者はあくまで別物であることを保っていた。つまり「盛り上がる」ことだけに囚われず、今それぞれにあるものを侵害することなく尊重し、活性化に繋げていくようにしているのである。

この事例から、なぜイベントが神事と共存することが地域活性化において有効であるのかを改めて考えてみたい。すると両者は、単に支え合う関係にあるというよりは、根本的に対照的な性格を備えていることがうかがいあがってくる。神事は今後社会情勢がどうなろうと、簡略化されながらも生き残っていく可能性が高い。しかし地域イベントはそうはいかない。参加者の数が激減し、開催者の意欲も低くなれば、実は簡単に中止や消滅に至ってしまう。全国的に見ても継承者不足の問題があるため、神事のやり方はある程度変化せざるを得ないのかもしれない。しかしイベントのように盛り上がりがなくなったからというだけの理由で

消滅する可能性は極めて低い。地域イベントが、「盛り上がる」ことや地域活性化を目的としない神事と共存することは、神事の禁忌を侵さないようにする難しさがあるが、イベントの消滅もまた防ぐことができる有効な方法でもある。

参考文献

- 足立重和 (2010) 『郡上八幡 伝統を生きる 地域社会の語りとリアリティ』新曜社
 飯島吉晴, 板垣徹, 伊藤高雄, 上野誠, 大石泰夫, 小川学夫, 香川雅信, 川森博司, 菊池義裕,
 鹿谷勲, 高岡弘幸, 武田正, 常光徹, 西瀬英紀, 山路興造 (1999) 『芸術と娯楽の民俗』
 雄山閣出版
- 折口信夫 (1955) 『髭籠の話』(『折口信夫全集第二巻』中央公論社
 菊池健策, 俵木悟, 古家信平, 松尾恒一 (2009) 『日本の民俗 9 祭りの快楽』吉川弘文館
 岸祐二 (2002) 『手にとるように民俗学がわかる本』株式会社かんき出版
 小松和彦編 (1997) 『祭りとイベント』小学館
 小松和彦, 関一敏編 (2002) 『新しい民俗学へ』せりか書房
 寒河江市史編纂委員会編 (1994) 『寒河江市史 上巻』
 寒河江市史編纂委員会編 (1999) 『寒河江市史 中巻』
 寒河江市史編纂委員会編 (2012) 『寒河江市史 下巻 現代編』
 寒河江市市役所資料「寒河江市町会別世帯人口調」
 寒河江神輿会 (2002) 『おらだの祭 寒河江まつり「神輿の祭典」20 周年記念誌』
 寒河江神輿会 (2012) 『おらだの祭 絆そして未来へ 寒河江まつり「神輿の祭典」30 周年記念誌』
 菅井冴織 (2015) 「神事化する地域イベントー山形県寒河江市の寒河江八幡宮例大祭と「神輿の祭典」を事例に一」東北学院大学教養学部地域構想学科 2014 年度総合研究 (卒業論文)
 西角井正大 (1985) 『祭礼と風流』岩崎美術社
 八木康幸 (1994) 「ふるさとの太鼓ー長崎県における郷土芸能の創出と地域文化のゆくえー」
 柳田国男 (1956) 『日本の祭』角川学芸出版
 結城登美雄 (2009) 『地元学からの出発 この土地をきたた人びとの声に耳を傾ける』農山漁村文化協会

参考 URL

- いい祭りニッポン (<http://www.ematsuri.ne.jp/detail.html?eid=93>)
 コトバンク (<http://kotobank.jp/word/%E6%B0%8F%E5%AD%90>)
 寒河江神輿會 HP (<http://mikoshi.r-cms.jp/katsugi/>)
 寒河江市役所 HP (<http://www.city.sagae.yamagata.jp/>)
 寒川神社 HP (http://samukawajinja.jp/info/in05_08.html)
 マピオン (<http://www.mapion.co.jp/map/admi06.html>)
 山形県 HP (https://www.pref.yamagata.jp/ou/somu/020020/03/mailmag/series/season/sagaematuri/img_vol241_02.jpg)